

經濟論叢

第八卷 第四號

(通卷第四十六號)

大正八年四月發行

論說

米國のI. W. W.運動の研究 (一)

米田庄太郎

(一) I. W. W. 研究の意義

米國の I. W. W. (The Industrial Workers of the World) (世界産業労働者) は、現代文明國に於ける最も過激なる労働團體の一にして、今日の露國を支配しつゝある過激派の思想も、直接には I. W. W. に淵源を發して居るとさへも云はれて居る。是れは今日露國過激派政府の牛耳を執りつゝあるトロツキ―を始め、其の一派の人々の中には露國革命の成功した時まで、米國に遁げて居つた人人は少なくなく、而して其頃には米國に於て I. W. W. は盛んに活動して居つたことから考へて、或は有り得可きこととも思ふ。併し余はまだ米國の I. W. W. と露國今日の過激派との直接關係を證明する、文書其の他の材料を充分手に入れることは出來ないから、茲に右の説を敢て肯定しやうとも

亦否定しやうともしないで、他日の研究に待つことゝしたい。とにかく米國のI.W.W.の運動は随分過激なる勞働運動にして、米國の政府も近來大に其の危険を感じて其の取締に苦心して居る。殊に米國が大戦に参加せし以來、其の取締に大に力を盡くし、昨年其の主領連を拘引してシガゴで裁判を開き、彼等を刑罰に處した程である。而して今や露國の過激派政府は其の過激思想を世界に普及する爲めに巨額の資金を投じ、且つ大に力を盡くして居る。云はれ、更に東洋に於ては支那人及び朝鮮人の間に、之を宣傳する爲めに力を盡くして居ると云ふことである。されば我國の領土内に於ても先づ朝鮮に於て過激思想の蔓延を見る恐れがある。殊に朝鮮の今日の事情を考へて見ると、過激思想が朝鮮人の間に入り易いと思はれるから、吾人は決して安心して居ることは出来ない。併し日本人間には恐くは露國より過激思想の侵入し來ることはあるまいかと思はれるが、而も米國よりは侵入し來る恐れがある。殊に米國に於ける勞働問題の現状から考へると、米國にある日本人の中にI.W.W.の思想に感染するものが起る恐れは十分にあると思ふ。或は既に之れに感染せるものが起つて居るのかも知れない。とにかく後に述ぶる如く、排日運動の急先鋒たる「米國勞働聯合會」とI.W.W.との間に激しき衝突の行はれて居ることや、又I.W.W.の運動方針などを考へ合せて見ると、少くも米國にある日本人勞働者中にはI.W.W.に同情を有するものは起り易いと想像されるのである。要するに今日の世界の形勢の下に於ては、吾人は米國のI.W.W.運動も單に之を米國に於ける一種の過激勞働運動として、對岸の火事視して置くことは出来ない。殊に今や我國に於ても勞働問題は大に世の注意を惹き、日々新聞雜誌上に於て盛んに論議されて

居る際であるから、隣邦の労働運動には大に注意する必要がある。されば余は茲に純然たる科學的興味の上から、社會學的に米國の I. W. W. 運動を研究し、夫れが現代労働運動の發達上又現代文明の發達上、如何なる意義を有するものであるかを究明せんとするのであるが、而も夫れは單に學究的意義を有するに止まらず、我國の現状に於て實際的にも甚だ重要なる意味を有するものと考へるのである。

(二) I. W. W. と「労働ナイト會」

先づ米國の I. W. W. 運動の起源から考究し始めることとするが、今米國に於て I. W. W. と稱せらるゝ労働團體が組織せられ、而して其の活動を始めた頃には、佛國に於ては革命的サンデカリズムが勃興して、大に世界の注意を引いて居つたのである。然るに米國の I. W. W. と佛國の革命的サンデカリズムとは、其の根本思想に於て大に類似する處があるから、否な其の根本思想は殆んど同一であるとも云ひ得られる程であるから、多くの人々は米國の I. W. W. は佛國の革命的サンデカリズムを輸入せるものであると考へたのである。併し是れは米國に於ける労働運動の歴史を深く研究しないで、只表面上から觀察して立てられた皮相な見解であることは、其の後多くの米國の社會學者の研究によりて論證されて來た。而して近頃では I. W. W. を以て佛國の革命的サンデカリズムとは全く獨立に、米國特有の産業的事情及び労働運動の狀勢に基づいて、發生し又發達せるものと見る見解は一般に行はれて來て居るかと思ふ。併し是れもあまりに極端に走せた見解にして、公平に

考察すれば、今日見るが如くにI. W. W.運動が發達し來れるに付て、佛國の革命的サンデカリズムの思想の及ばせる影響は、決して輕視す可きものでないと思はれる。要するに米國のI. W. W.運動は單に佛國の革命的サンデカリズムを輸入せるものに過ぎぬと見るは、勿論皮相な見解であるが、さればとて之を以て何等外國の勞働運動の實行や思想の影響を受けずして、米國に於て全然獨立に發達せるものゝ如くに見るのも、又は出來るだけ外國の影響を少なく見て之を説明せんとするも、矢張り穩當であるまいと思ふ。殊に千九百八年後に見るが如きI. W. W.の發達は、佛國の革命的サンデカリズムの思想の影響を重要視せずしては、到底十分に理解することは出來ないと思はれる。それで余は米國のI. W. W.運動は本來は外國より移植されたものでなく、同國に於て自然に發生せしものであるが、而も今日見るが如くに其の思想の根柢が固められ、又今日見るが如き方針に於て夫れが確實に發達するに至つたのは、佛國の革命的サンデカリズムの影響に負ふ處少なくないと思へる。而して余は茲にかゝる見地から見て其の起源及び發達を考究して見やうと思ふのである。

今米國のI. W. W.の起源を探究するに當て、先づ注意す可きはI. W. W.は其の主義を革命的産業組合主義 (Revolutionary industrial unionism) と稱し、又其會員は米國のサンデカリストと稱せらるることに敢て異論を唱へないが、而も彼等自身は寧ろ革命的産業主義者或は單に産業主義者 ("Revolutionary industrial unionists," or "Industrialists") と稱せらるゝを好むと云ふことである。

要するにI. W. W.は職業組合主義 (Trade-unionism) に反對して産業組合主義を主張すると云ふことと、又平和的或は妥協的ではなくして革命的であると云ふこととを以て、其の根本的精神となすも

のである。されば其の起源を究明せんとするに當て、吾人は先づ米國に於ける産業組合主義は如何にして發生したかを研究し、又夫れが如何にして革命的となつたかを研究せねばならぬ。

嘗て米國西部の或地方に於て I. W. W. の一主領が盛んに同盟罷業を煽動して居つた際、或新聞記者が彼に向ふて「I. W. W. の歴史を學ぶ爲めには如何にするは最善の方法なるか」と尋ねたるに、彼は之れに答へて「先づ勞働ナイト會 (The Knights of Labor) を學べ、I. W. W. の最も多くの部分は其處にある」と云ふたと傳へられて居る。而して又米國の學者中には I. W. W. 運動は單に新しき境遇の下に復活されたる「勞働ナイト會」の運動に、外ならぬものゝ如く論じて居る人々は少なくない。併し此の如く I. W. W. 運動を歴史的に「勞働ナイト會」の運動と結び付けて考察することは如何程正當であらうか。先づ I. W. W. の歴史的起源を究明すると云ふ見地から見て、「勞働ナイト會」の思想及び手段を研究して見やう。

米國に於ては千八百三十年代の始め頃より、何かの形式の下に勞働組合を結合して、勞働の勢力を統一する必要は感ぜられ、而して之れが爲めに種々なる團體の設立が試みられたが、其等の諸團體の中で最も有力なりしは、千八百六十七年に設立されたる「聖クリスピン、ナイト會」であつた。是れは製靴工の間に組織されたるものにして、一時は會員四萬人を數へ、其の勢力大なるものであつたが、併し種々なる理由によりて遂に衰亡した。尙ほ同時代に設立されたる「國民勞働協會」(The National Labor Union) も一時會員六萬四千人を數へ、有力なる勞働團體となつたが、是れ亦種々なる理由によりて其の勢力を失ひ、千八百七十二三年頃遂に消滅した。

然るに同じく此の頃に設立された「勞働ナイト會」のみが獨り段々に發達して、遂に米國に於て組織されたる最初の大勞働團體となつたのである。而して其の會員は千八百八十六年には實に七十萬人以上に達したと云はれて居る。併し其の後は此の勞働團體も亦段々に衰退して、遂に千八百九十年代に入りてより全く「米國聯合同盟會」(The American Federation of Labor)の爲めに壓倒さるゝに至つたのであるが、今此の「勞働ナイト會」こそ實にI. W. W.の前身であると云はれて居るのである。それで茲に先づ其の精神及び組織を研究して、以て其處にI. W. W.の面影を如何程發見し得らるゝかを考察して見やうと思ふ。

今「勞働ナイト會」の組織を、其の隆盛時代に就て觀察するに、先づ其の單位をなすものは地方會(Local Assembly)と稱せらるゝものであるが、其等の地方會の或者は同一職業の人々のみより成立して居るが、併し他の者は數種の職業の人々より成立して居ることを見る。是れによりて吾人は先づ「勞働ナイト會」は嚴密なる職業組合(trade-union)の團結でないことを學ぶのである。尙ほ千八百八十一年以後には女子の入會をも許し、全く女子の會員のみより成立せる地方會さへも存在して居つた。而して會員は一般に賃銀勞働者より成立して居つたが、併し然らざるものも敢て入會を拒まなかつた。又賃銀勞働者にありても熟練勞働者と不熟練勞働者との差別を立てずに入會を許した。更に千八百八十三年よりは黒人の入會をも許した。而して一時黒人會員は甚だ急速に増加したのである。此の如く男女の別、人種の別、賃銀勞働者と然らざるものとの別、又熟練勞働者と不熟練勞働者との別、總て英國の勞働組合に於て、又米國の勞働組合に於て

も其の後は大に重要視されて來た諸種の差別に一切頓着せず、「勞働ナイト會」は組織されたのである。されば嚴密に云へば夫れは純粹なる勞働組合ではないのである。併し其の後新に組織される地方會の會員の、少くも四分の二は賃銀勞働者であらねばならぬことを規定し、又酒の製造、及び販賣に關係するものは一切入會を許さぬこととなし、更に醫師、辯護士、銀行家、株式仲買人職業的賭博者等にも入會を許可せぬこととした。

「勞働ナイト會」の單位たる地方會の組織は、上に述べしが如きものであるが、此等の地方會の幾箇かゞ結合して區會 (District Assembly) を組織し、而して其の上に總會 (General Assembly) が設けられて居つた。然らば其の區會なるものは何を基礎として組織されて居つたかと云ふに、始めには或場合には職業部類を基礎として組織せられ或場合には地理的境界を基礎として組織されて居つたが、後には一般に州を基礎として組織せられ、區會とは一般に州會を意味することゝなつた。但し地方會は區會を通じて全體に屬するを原則とするが、併し又直接に總會と結び付けるものもある。

「勞働ナイト會」の組織は大體に於て以上述べしが如きものであつて、之れに依つて吾人は同會は一種の勞働團體として如何なる性質のものであるかを、大凡推察することが出来るが、尙ほ其の精神及び主張を考究して一層之を明らかにして置かうと思ふ。

今「勞働ナイト會」の目的は如何なるものであるかを、同會の規則書の序言に就て調らべて見るに、其の目的として左の二つの事項が擧げられて居る。

I. 富ではなく産業的及び道德的價値を以て、總て簡人的及び國民的偉大の眞正なる標準となすこと。

II. 労働者の生産する富の十分なる享樂、彼等の知力的、道德的及び社會的能力を發達させる爲めに十分なる餘暇、團結の一切の利益及び樂しみ等を彼等に確保すること、一言に云はゞ労働者をして進歩しつゝある文明の利益及び榮譽に參與せしめること、

而して此等の目的を達する手段として、先づ政府に對して同會の要求する一定の事項を列擧し、次に又議會に對して同會の要求する一定の事項を列擧し、終りに同會自身の特に力を盡くさんとする事項を擧げて居るが、夫れは左の如きものである。

XIX. 一種の協力的産業組織 a co-operative industrial System (我國の産業組織) を實行することによりて、遂に賃銀制度を廢止するに至るが如き諸種の組合機關を設立すること、

XX. 同等なる仕事に對して男女同等の賃銀を支拂はしむること、

XXI. 八時間以上の労働を一般に拒否することによりて、労働時間を短縮すること、

XXII. 傭主と傭人との間に同情の紐帶が強められ、又同盟罷業が不必要になされ得る爲めに、兩者の間に起る一切の争議を仲裁に附するを傭主に勸告すること、

以上の諸項に就て考察するに、「労働ナイト會」は別に革命的なる労働團體であつたとは思はれない。もつとも其の賃銀制度を廢止せんとする點は、革命的性質を帯びて居ると見做し得らるゝ。

が、併し夫れは協力的産業組織の漸次的發達によりて、自然に賃銀制度の消滅することを望むものであつて、I. W. W. の如き過激な手段によりて忽ち賃銀制度を廢止せんとするものと、大に其の精神は異なつて居る。若し夫れが爲めに、米國の一部の學者の考へる如く、「勞働ナイト會」はI. W. W. の前身として、夫れと殆んど同様に革命的なものであつたと見做さねばならぬとするならば、今日の英國の消費組合の如きも、矢張り革命的な社會運動と認めねばならぬ。併し英國の消費組合は最もも穩健なる社會運動の一種と見做されて居るので、之を革命的なものと思はるものはない。尙ほ今日一定の社會運動が革命的であるや否やを決定するに當て、其の第一の標準とせらるゝものは、運動の目的よりは寧ろ其の用ひんとする手段である。此くて舊マルクス派の社會主義は革命的であると云はるゝに對して、新マルクス派或は修正派の社會主義は改良的或は進化的であると云はれて居るのである。

尙ほ勞働爭議を仲裁に附して以て同盟罷業を避けんとする點は、I. W. W. の精神とは全く異なるもの、否な夫れと正反對のものである。併し茲に注意す可きは、「勞働ナイト會」は其の公に發表せる規則書の序言中には、仲裁制度によりて同盟罷業を避けんとする精神を宣明して居るに係らず、一時盛んに同盟罷業を行なふたことである。殊に千八百七十八年より千八百八十三年に至る間に最も盛んに之を行なふた。而して其の後急激に衰退したる理由の一は、あまり頻に同盟罷業を行なふたことであるとも云はれて居る。併し千八百八十三年後は大に同盟罷業を牽制する方針をとり、其の地方會を支配する規則中にも、同盟罷業を出来るだけ抑制する規定を新に設け

て居る。又同會の首領パウダーリの如きは、「吾人の苦む害惡を除き去る途は、自殺的同盟罷業にあるに非らずして、十分有効なる組織にある」ことを宣言して居る。要するに「労働ナイト會」は、一時同盟罷業を盛んに行なふたことはあるが、而もI.W.W.の如く、之を以て労働運動の最も根本的な、又最も有効な闘争手段と考へたものでないのである。又今日I.W.W.に於て重要視する一手段「サボターヂュ」も、「労働ナイト會」の會員中に實行したものがあつて、併し是れも彼等が寧ろ偶然に用ひた臨時的な手段であつて、意識的に労働者の闘争手段として之を用ひたのではないことは明らかである。

されば「労働ナイト會」の用ひたる手段中には、實際上I.W.W.の用ゆる手段と類似するもの或は一致するものがあつても、其の類似或は一致は寧ろ外面上のものであつて、其の精神には異なる處があると云はねばならぬ。併し運動手段に於ける兩者の類似は、只外面上のものに過ぎないとしても、其の根本的精神に於ては兩者に一致する處があつて、夫れによりて「労働ナイト會」を以てI.W.W.の前身と見做し得られないかと云ふ問題が起り得る。而して又此の問題は兩者の關係を考究するに於て最も重要なものと考へられるから、余は次に之を論究して見やうと思ふ。

今労働ナイト會の首領が同會の起源を説述せる言葉の中に下の如きものが發見される。即ち「労働ナイト會」の起源は職業組合ツレイド、ユニオンが廣き、遠大な、根本的な原理に基づきて労働問題を握み、且つ之を満足に取扱ふことに失敗したと云ふ事實にあるのである。「労働ナイト會」の設立が可能となつたのは、是れ職業組合が人間の權利を承認することが出來ないで、只職業人ツレイドの權利のみを重要

視したるが爲めである云々」。又サイモンは「労働ナイト會」の歴史中に左の如く述べて居る。即ち「世界に於ける如何なる労働團體も、嘗て労働ナイト會ほどの強さと團結力を具へたことはない。是れは實に労働問題に於ける一の新しき因素である。而して其の結果はまだ何人も之を豫測することは出来ない。…「労働ナイト會」は一の職業組合ツレイドナーユニオンでも亦幾多の職業組合の集合でもない、夫れは最も堪能なる熟練労働者と全く同等なる權利を認めて不熟練労働者の入會を許す。夫れは相互防衛及び統一の攻撃の一團體にして、而して總ての注意深き思想家は、當代社會的諸勢力中の一として之を承認せねばならぬほど、よく整頓し且つ強固なるものである。「労働ナイト會」の生長の驚く可き速度は、夫れ自身に於て其の有效の最善なる證據である。「労働ナイト會」が生存し且つ堅固に生長すると云ふことは、夫れが生存し生長す可き權利を有つて居ることの第一の證據である。而して「労働ナイト會」は今日文明が労働者に與へた最も有力なる武器である云々」

右に引用せる言葉によりて知らるゝ如く「労働ナイト會」は職業組合主義ツレイドナーユニオンに反對するものである此の事はさきに同會の組織を述べし中にも明らかに現はれて居るので、つまり職業組合の如く職業を單位として労働者を團結せしめんとするのではなく、更に一層廣大なる基礎に於て労働者の團結を圖らんとするものである。隨ふて其の目的も先づ夫れ夫れの職業の利益を圖ることを第一とするのでなく、始めから労働者全體の利益を第一とするのである。尙ほ其の會員中には今日嚴密なる意味にて云ふ労働者即ち賃銀労働者以外のものをも包含して居るので、嚴密には労働團體とは云ひ得られない程のものである。更に熟練労働者と不熟練労働者との差別を立てず、又男女

の差別も人種の差別も認めずに入會を許して居る。而して此等の點に於ては職業組合主義殊に「米國労働聯合會」の主義とは大に異なつて居るのである。然るにI.W.W.も亦職業組合主義に反對し職業を以て單位となさず、熟練労働者と不熟練労働者との差別を立てずに入會を許し、又人種の差別をも認めて居らない。されば其等の點に於て「労働ナイト會」はI.W.W.と一致して居るので、其の前身であるとも云ひ得られないことはない。併し尙ほ詳しく吟味して見ると、吾人は又兩者の間に重要な差異あるを發見するのである。

先づ第一に注意す可きはI.W.W.は純然たる賃銀労働者の團體にして、而して資産者階級の利益と労働者階級の利益とは根本的に相反するもの、隨ふて兩者の間に妥協調停の途は全く絶無であり、兩者の並存する以上は鬭争は必然的なものであると見る思想を根柢となすものであるが「労働ナイト會」はさきに述べし處によりて知らるゝ如く、さほどに強く階級鬭争を高調して居らないのみならず、賃銀労働者以外のものゝ入會さへも許して居る。「労働ナイト會」の主張せるが如き程度の階級鬭争は職業組合主義に於ても認めて居るので、其の點に於ては絶對的階級鬭争を前提として立論して行くI.W.W.とは大に異なつて居ると思はれる。是れ「労働ナイト會」はI.W.W.の如き過激な革命主義を主張して居らなかつた所以であらうと思ふ。

併し労働運動の研究上「労働ナイト會」とI.W.W.との間に存在する根本的差異として、更に重要視す可きものがある。夫れは「労働ナイト會」は職業組合主義に反對して居るが、併し特に産業組合主義を主張するものでないといふ事である。抑々今日までに發達せる労働組合の全體を總觀

すると、吾人は之を根本的に三種の類型に大別することが出来ると思ふ。其の一は労働者全體の共同的利益を圖ることを直ちに其の目的として組織されたる労働組合の型にして、其の二は夫れ夫れの職業の利益を圖ることを當面の目的として組織されたるもの、而して其の三は或意味に於ては兩者の中間に位すると見做し得られるものであるが、つまり労働者全體の共同的利益を圖ることを其の直接の目的とするのでも、又夫れ夫れ職業の利益を圖ることを其の直接の目的とするのでもなく、夫れ夫れの産業の共同的利益を圖ることを以て其の直接の目的となすものである。此等三種の労働組合の類型の中にて第一の類型のものは一般的労働組合と稱せられ、第二の類型のものは特に職業組合ツレツツエニエンと稱せられ、而して第三の類型のものは、特に産業組合インダストリアルユニオンと稱せられて居るのである。尙ほ此の産業組合は最も新しく發達せるものであるから特に新労働組合とも稱せられて居る。今米國の労働組合の歴史的發展に就て考察して見ると、職業組合主義は最も早く發達し、而して又今日最も有力なる米國の労働組合は原則として職業組合主義を奉ずる「米國労働聯合會」である。之れに對して第一の類型を比較的に最もよく代表するものは、「労働ナイト會」である。夫れは職業組合主義に反對して起れるものなることは、さきに述べしが如くであるが、併し其の直接の目的は大れ夫れの産業の共同的利益を圖ることにあるのでなく、労働者全體の共同的利益を圖ることにあるので、産業組合主義を主張せるものでないのである。然るにI.W.W.は特に産業組合主義を主張するものにして、職業組合主義に反對すると、共に又「労働ナイト會」の主義にも反對するものと見做し得らるゝのである。もつともI.W.W.は職業組合主義の如く偏狹に箇々の職業の利益を重要視せず、一層廣く労働者の利益を圖らんとする點に於て「勞

働者ナイト會」に類似する處がある。而も漠然労働者全體の共同的利益を主張するのではなく、一産業の共同的利益を特に重要視すると云ふ點に於て、「労働ナイト會」の主義とは異なつて居るのである。

以上述べ來りし處を總括して考ふれば、I. W. W.と「労働ナイト會」とは其の用ゆる運動手段に於て種々類似する處あるに係らず、其の主義或は精神に於て異なつて居つて、前者は後者を復活させたものと見ることも、亦後者は前者の前身であると見ることも穩當でないと思ふ。要するにI. W. W.は革命的な産業組合主義を其の精神となすものと見るに於ては、其の産業組合主義的であると云ふ點に於ても、亦更に其の革命的であると云ふ點に於ても、共に「労働ナイト會」とは異なつて居るのである。さればI. W. W.の起源を探究するに當て、特に「労働ナイト會」を重要視するは穩當でないと思ふ。「労働ナイト會」は産業組合主義的でも、亦革命的でもないのである。吾人は又「労働ナイト會」の起れる以前の労働組合の何れに於ても、産業組合主義はまだ發生して居らなかつたと思ふ。是に於てかI. W. W.の起源を究明する爲めに、先づ米國に於て産業組合主義は如何にして發生せしかを探求せんとするには、吾人は「労働ナイト會」以後の労働組合の發達を研究せねばならぬ。つまり米國の産業組合主義は千八百八十五年頃より千九百年頃に至る間、一方に於て「労働ナイト會」が段々に衰退するに反して、他方に於て「米國労働聯合會」が段々に發達して大なる勢力となれる其の期間に發生せしものと認めねばならぬ。然らば右の期間に於て産業組合主義は如何にして發生せしか。

(三) 米國に於ける産業組合主義の發生

今千八百八十年代の終り頃より第十九世紀の終りまでの米國勞働史上に於て、特に注意す可き現象は、「勞働ナイト會」の段々衰退するに反して、「米國勞働聯合會」が段々發達して勞働界に於ける重大なる勢力となつたことである。然らば此の期間に於て何故に「勞働ナイト會」は衰退し、又之れに反して「米國勞働聯合會」は大に發達したかと云ふに、先づ「勞働ナイト會」の衰退の主要なる原因として、左の諸事項が一般に認められて居る。(1)原則としては同盟罷業に賛成して居らないのに係らず、實際に於ては随分盛んに同情的同盟罷業を行なひて多大の資金を費やし、而して其等の同盟罷業が多く失敗せしこと、(2)政治運動に熱中せること、(3)混合地方會制度ミックスドローカルアソシエーションと國民的職業會制度との二重組織の弊害、(4)幹部役員の手に權力をあまりに集中せしこと。併し其の衰退の最も根本的原因は、此の期間に於ける米國産業界の形勢が、「勞働ナイト會」の主義よりは職業組合主義の活動に一層都合よかつたと云ふことであらうと思ふ。換言すれば此の期間の米國産業界の形勢の下に於ては、「勞働ナイト會」の主義よりは職業組合主義の方が、勞働者の實際的利益を圖るに一層有効であつたと云ふことが、つまり「勞働ナイト會」を衰退させ、而して之れに反して「米國勞働聯合會」を發達させたのであらうと思ふ。

夫れ第十九世紀の後半紀に於ては、米國の諸工業は主として熟練勞働者に依りて行はれて居つたので、器械が盛んに使用さるゝに至つては彼等の機能は變動したが、併し彼等は矢張り最も重要な地位を占めて居つた。尙ほ此頃は工業的企業工業的企業の集中が丁度始まつた時であつて、最も

重要なる諸工業に於ては夫れが爲めに勞働者の状態はまだあまりに變動するに至らなかつた。而してかゝる状態の下にありては、其の團結鞏固にして、高い入會料と高い會費とによりて、豊かなる財力を具へて居つた職業組合は、夫よりも廣い基礎の上に築かれ、隨ふて其の團結の薄弱なる勞働組合よりは、賃銀を高め勞働條件を改善する爲めに一層有效な活動をなすことが出來たのである。此くて「米國勞働聯合會」は段々其の方針を職業組合主義に固め、而して夫れに従ふて益々勢力を扶植して來たのであるが、千八百九十年代の中頃に至つては、其の職業組合主義の方針は確實に樹立された。詳しく云へば「米國勞働聯合會」の主義及び方針は大體上左の如くに確定されたのである。(1)職業自律の原理を高調すること、即ち各職業組合に自己の運命を獨立に形成する完全なる自由を認むること、(2)僱主と締結せる契約を嚴格に守る精神を鼓吹すること、(3)出來るだけ同盟罷工を避け、而して調定及び仲裁を望むこと、(4)社會主義に對しては假令反對の態度をとらないにしても、とにかく其の主張するが如き究極的な社會的理想には關心しないこと、(5)獨立なる勞働政黨を組織して、獨立なる政治的運動を行ふことに反對すること。

此くて「米國勞働聯合會」は職業組合の經濟的自立と經濟的私利心とに依頼せる、堅固な獨立な職業團體の緩い聯合となつた。而して各團體をして他の團體よりあまりに多く犠牲を要求することなしに、自己の利益を出來るだけ増進せしむることに専ら力を盡くすこととなつた。されば「米國勞働聯合會」は各職業團體の利益の増進には、大に貢獻する處があるが、併し勞働者階級全體に亘りて、共同的仰上の精神を發達させることには、別に貢獻する處はないのである。

併し「米國勞動聯合會」が右の如き方針に於て發達し、米國の勞動界に於て重大なる勢力を獲得しつゝありし際、一定の工業に於ては其の方針に従がひ難き事情が存在し、或は發達して居つた。即ち職業組合主義によりては、よく勞動者の利益を圖ることの出來ない事情の存在し、或は發達しつゝありし工業があつた。されば其等の工業に於ては、勞動者が彼等の利益を圖る爲めには嚴格なる職業組合とは異なる勞動組合を組織せねばならなかつた。而して茲に産業組合が芽を發して來たのである。

今當時職業組合が、安全な永久的な基礎の上に築き上げ得られない事情の存在せる工業の數は可なり多かつたが、其等の中で先づ有力なる新しき勞動組合の組織を企だてたるは、酒造勞動者及び鑛山勞動者等であつた。それで余は茲に特に此等の勞動者に就て、彼等は如何にして新しき勞動組合を組織し、産業組合主義を發生させたかを考究することとする。

抑々米國に於ては酒造業者は最も早く國民的團結を組織したるものゝ一にして、彼等は始めは政府の課する過度の酒造税に對して自家を防衛する爲めに、鞏固なる國民的團結を組織したのであるが、後には其の團結を利用して、酒造勞動者の要求に抵抗するに至つたのである。此くて酒造勞動者が相團結して夫れ夫れの職業上の利益を圖らんとするや、國民的に團結せる酒造業者の鞏固な又組織的な抵抗に遭遇し、其の目的を達することが出來なかつた。而して彼等が夫れ夫れ職業の差別に従ふて職業組合を組織するだけに止まる以上は、到底何事をもなし得ないことは明白になつた。此くて彼等は新しき策略を工夫する必要に迫まれて來たが、此の際彼等の工夫した方法は、即ち職業の差別を問はず、酒造業に關係ある總ての勞動者を結合して一大組合を組織

し、酒造業に於ける企業家の國民的大合同團結に對抗して、労働者の國民的大合同團結を起すと云ふことであつた。此くて酒造匠組合 The Brewers Union を改名して「米國合同酒造労働者國民協會」(National Union of United Brewery Workmen of the United States)と稱し、而して杜氏、麥麴工、機關手、火夫其他酒造工場に關係ある總ての労働者の入會を許したのである。是れ即ち今日職業組合に對して産業組合と稱せらるゝものゝ精神である。要するに米國に於ける産業組合主義は、別に理論上から考案されたものでなく、職業組合組織では到底労働者の利益進歩の目的を達し難き事情の下にある産業の労働者が、實際の必要に迫られて工夫せるものである。而して鑛山労働者間においても亦職業組合の效力の少ないことは、從來の經驗によりて痛切に感ぜられて居つたが、彼等の中よりも遂に矢張り實際の必要に迫られて鑛山業に關係ある一切の労働者を結合する一大組合を組織し、以て鑛山労働者全體の勢力を統一せんとする企だてが起つて來たのである。而して今日産業組合主義の最も堅固なる型及び最も熱心なるチャムピオンの一と認められて居るのは「米國合同鑛山労働者」The United Mine Workers of Americaである。

今右に述べしが如き事情によりて酒造労働者や鑛山労働者の間に新しき労働組合が組織せられ而して其の效驗が著しく現はるゝや、同様なる事情の下にある他の種々なる産業の労働者間にも之れに倣ふて新しき労働組合を組織するものが續々起り、更に事情を斟酌して職業組合と産業組合とを適當に結合せんとするものも起つて來たのである。以上述べし處によりて知らるゝ如く、米國に於ける産業組合は全く純然たる實際問題として發生したので一定の事情の下にある労働

者が彼等の經濟的奮闘に於ける生死問題として、此の新しき労働組合の形式を工夫したのである。然るに産業組合が一度實際に組織されて見ると、夫れが労働運動の發達上重大なる意義を有することを觀破せる労働指導者が現はれて來た。彼等は先づ此の労働組合形式に於て、職業組合に常に附着せる難問題（即ち一の職業組合と他の職業組合との間に自から障壁が出來、又彼等の間に利益の衝突の起る傾向を如何にして除去し、以て労働者全體を一層親密に結合せしむるを得るやと云ふ難問題）を解決する手段を發見したと考へ、更に産業組合の原理は一階級として労働者全體を包括し、彼等の共同的利益を高調するまでに擴張され得るものなるを感じて來た。此くて其等の人々は熱心なる産業組合主義の理論的及び實際的主張者となつた。而して此の如き人々は「米國労働聯合會」の會員中にも、亦「労働ナイト會」の會員中にも、更に諸處に於て新に勃興せる種々なる産業組合の會員中にも起つて來た。夫れよりして今や産業組合主義は米國に於ける有力なる労働組合の一主義となつて居るのである。

併し産業組合主義は必ずしも革命的事であらねばならぬと云ふ譯のものでない。之を革命的事のとして實行することも、亦平和的事のとして實行することも出来る。現に此の主義を平和的に實行して居る労働組合は幾多存在するのである。されば革命的産業組合主義を主張する I. W. W. の如きもの、起るには、上に述べしが如くにして生起せる産業組合主義をして、更に革命的事のとならしむる特別な事情があらねばならぬ。然らば其の特別な事情とは如何なるものであるか。之を究明するには吾人は米國に於ける社會主義と労働組合との關係を研究せねばならぬと思ふ。